

教員の授業力の育成と学校づくりに関するコンサルテーション

研究代表者氏名 谷口 知美

共同研究者氏名 船越 勝 越野 章史

二宮 衆一

連携学校名 紀の川市立貴志川中学校

1. 研究の趣旨

受験競争のプレッシャーが中学生に困難と生きづらさを押しつけていること、「自分崩し・自分づくり」(アイデンティティの解体と再編)の時期に中学生があたっているといった制度的条件が中学校にはある。それだけでなく、現代の子どもたちの変容、保護者や地域住民の変貌が中学校をめぐる困難をいっそう大きなものになっている。だからこそ、中学校は、逸脱行動も表面に現象してくる時期に当たり、実践的な困難に直面せざるをえない。

しかし、こういった困難ななかにある中学校に対する制度的なサポート体制は、十分に構築されていない。教員の実践的な指導力の中核をしめる中学校の教員の授業力の形成は、学校づくりのなかでもっとも重要な課題のひとつである。

こうしたことをふまえて、一人ひとりの生徒が生き生きと活躍できる学校づくりを進めていくために、授業の参観およびそれにもとづく研究協議に参加して、授業力の形成を中心とした学校や教員の課題克服に向けた指導助言をしてきた。

2. 今年度の活動

貴志川中学校との共同研究は、今年度で 14 年目になる。毎年多くの教職員の異動があり、これまでの取り組みをどう継承、発展させ、教員全体の授業および生徒理解の力量をどう高めていくかを問うてきた。共同研究を進めていくなかで、教員全員が2年に一度は研究授業を実施し、授業を見あう文化がつくられてきた反面、生徒が落ち着いてきたなかで、当初の危機感が薄れて授業研究を「こなしている」部分があることが否めない。そこで、昨年度からは、貴志川中学校の教職員がより主体となり、貴志川中学校の課題を明らかにして、研究テーマをつくりあげていくというプロセスを重視し、取り組みを進めている。

①5月20日 授業研究部長との話し合い

今年度着任された校長先生と、授業研究部長、谷口の3名で、貴志川中学校の課題や、今年度の共同研究の方向性を議論した。

②6月20日 校内研修

前回の議論を受けて、谷口が「基礎学力とは何か」と題して校内研修で話をした。広岡一勝田論争といった学力論争や、PISA 調査とその影響、「改革」の背景を探る視点について話し、「現在の社会状況、目の前の子どもたちの姿をふまえ、どのような人間を育てたいと考えていますか?」と問うた。

その後、教科等のグループに分かれて話し合い、次のような意見が出た。

③11月1日 授業研究

全校で二つの提案授業(1年生美術科、2年生英語科)が実施され、船越(美術科の授業)、谷口(英語科の授業)が参加した。提案授業別協議会では、担当教科をこえて参観した教師たちが、プレ授業からの変化や、授業のなかでの生徒のようすを語り合いながら、授業のふりかえりをおこなった

全体協議会では、授業別協議会での議論を共有した後、大学教員からコメントをした。主な内容は次のとおりである。「中等教育は『バルカン諸国化』していると言われるなかで、教科を超えて授業研究のグループをつくり、プレ授業や提案授業を通して他教科から学び合い、自分だったらどうするかと自分事として取り組めたのが良かった。」「一年生の授業で、どれだけ意欲を引き出すかが大事」「一年生は、グループの交流のしかたを教える必要がある。グループ内の役割と責任を明確にすること、頑張っているグループを褒めたり、そうでないところを指導したりする必要がある。」

④1月19日 授業研究

提案授業は全校で一つだけ(理科の授業)実施し、教職員全員が参観する予定である。大学からは、越野、二宮、谷口が出席予定である。

3. 今後について

貴志川中学校では、学年別協議会を大切に育み、「教科の壁」を越えて、生徒理解、どの子も参加する授業づくりを進めてきた。生徒指導と授業づくりを別立てで議論するのではなく、授業のなかの具体的な子どもの姿、事実を出し合うことが肝要であり、それが学校づくりを支える核となると私たちは貴志川中学校から学んできた。

昨年度からは、貴志川中学校の教職員が学校の課題を明らかにして研究テーマをつくりあげていく過程を重視し、借り物の言葉ではなく、日々生徒たちと関わってきた教職員が現状を直視し、分析し、目指すべき学校・子どもの姿について議論してきた。「教科の壁」を超えて提案授業を構想し合い、プレ授業を参観し、提案授業での子どもの姿をもとに前進させてきたことの意義は大きい。

「2030年代に対応できる資質・能力を備えた生徒の育成」 ～ 全ての生徒の可能性を生かすために ～

紀の川市立貴志川中学校

10数年前、本校では生徒の授業エスケープ状態によって職員室のインターホンが頻繁に鳴り、その対応に職員が追われるといった状態が続いていた。また、一部の生徒の問題行動によって学習環境が崩れ、いわゆる学校の荒れを経験した。そこで、和歌山大学の協力のもと、この状況を改善する方策として「すべての生徒が満足する授業こそ、最高の生徒指導である」というスローガンを掲げ、授業を中心にした改革で、学習環境を安定させるよう全教職員が教育活動に取り組んできた。

現在「荒れ」は陰を潜め、生徒は落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っている。一方で、家庭が抱える課題や生徒自身の発達課題に起因する問題行動の増加、さらに、新型コロナウイルス感染症拡大による生活様式の変化など、ここ数年で子供達を取り巻く環境は大きく変化した。

また、学習環境においても新学習指導要領の本格実施や「GIGA スクール構想」による一人一台端末の前倒導入、個別最適な学びと協働的な学びの実現が示された「令和の日本型教育」が答申されるなど、これまでにない大きな教育改革の波が押し寄せている。

そこで、今年度は「主体的・対話的で深い学び」を実現するため、継続的・計画的に系統化して取り組むことができるよう、今後3年間の研究主題を以下の通り定め、新しい時代に対応できる授業スタイルを確立していきたいと考えている。

令和4年度

「生徒が基礎学力を身に付け、主体的に学習に取り組むための指導方法の工夫改善」

令和5年度

「生徒が対話的な学習を通して、自らの考えを深め、発信できる指導方法の工夫改善」

令和6年度

「生徒が既習内容を自らの生活の中で生かすための指導方法の工夫改善」

本年度の取り組み

昨年度、昨今の学習環境と生徒の実態を踏まえて新しく研究主題を設定した。今年度はその研究主題を引き継ぎ、9月・11月に2名、1月に1名の先生が授業を行ってきた。また、昨年度の課題にも取り上げられた形骸化された授業研究を一新するために、以下の変更点を加えた。

〈変更点〉

- ① 教科・学年を越えたチーム体制による授業づくりの取り組み
- ② 「研究授業」から「提案授業」への変更

① 教科・学年を越えたチーム体制による取り組みについて

昨年度までは、研究授業での授業者を選出する際、各学年単位で行っていたため、1年の中で同じ教科の研究授業が重複する 경우가少なくなかった。その理由のひとつに、教科ごとの教員数のアンバランスが挙げられる。国語・社会・数学・理科・英語の教員数が多く、自然と授業者もこの教科に偏りがちであった。そのため、技術・家庭・音楽・美術・保健体育の授業を参観する機会が少なかった。しかし、後者の4教科は実技を伴うことが多く、前者の教科では見られない生徒の能動的な様子を担当教員から聞くことがあり、生徒が積極的に取り組むことのできる授業作りの工夫を発見できる貴重な場となっている。そこで、今年度は8つの教科グループに分け、授業者以外に同じ教科から1名と、授業者と同じ学年に所属する他教科の教員1名を加えた3名で構成し、教科アドバイスや生徒観を踏まえたアドバイスがされることを目的とした。これらにより、2年間で全てのグループが授業研究を行うことが可能となり、様々な教科を横断的に参観できるようにと考えた。

② 「研究授業」から「提案授業」への変更について

これは、単なる名称変更ではない。これまでは、授業者一人が研究授業を行うという形式であったため、「特別な授業をしないといけない」との思いや「参観頂いた先生方から受ける評価」への精神

的負担が大きく、研究授業自体が敬遠されがちであった。そこで、「研究授業」という名称を「提案授業」に変更し、研究主題に沿った授業をするために「こんな授業をしてみました」「この授業アイデアはどうか」といった授業アイデアの発表であるという意識で取り組めるようにした。つまり、「完成されたもの」や「集大成」ではなく、あえて、未完成のものを提案し、残りを参観した者で完成させ、授業者に返すという流れである。このことで、授業をした全ての者が「得をする」という感覚を定着させたいと考えたことによる変更である。

○現職教育

研究主題である『基礎学力を定着させるための工夫がされている授業』において、「(基礎) 学力」が漠然としたものであり教員間で認識が相違しているは研究主題に沿った授業計画を組み立てることが難しいと考え、6月に和歌山大学谷口知美先生を講師に招き、「(基礎) 学力とは何か～これまでの日本の議論から考える～」というテーマで講義いただいた。このことで、「(基礎) 学力とは何か」について、普段交流することが少ない教科間で交流する機会を設けることができた。

次の表は、実際に教科で話し合われた内容である。各教科にとっての「(基礎) 学力」とは具体的にどのような力なのか、その力を養うためにはどのようなことを大切に教えていかなければならないか等「(基礎) 学力」についての考えを交流した。

国語	課題を自分で解決するためのことばの力。 そのために、漢字、読解力、話す力。教科書の内容が多い!しかし、現状の授業時数では教えられない。教科書についてこれない子が、学習意欲を低下させている。
社会	社会的な見方・考え方をもって自分の意見を出し、深めること。 地理なら〇〇、歴史なら縦軸、公民ならこれからの社会、建設的な内容になるので、3分野をうまく使いながら社会的なものの見方・考え方を育てたい。教科書の内容だけでなく、疑問をもたせたり、疑わせたりもしたい。
数学	ある程度の知識を持った上で、その知識をどう使っていけばいいか判断する力。そのためには、使い方も教えないといけない。そこが難しい。どうするか。
理科	理科の現象をどれだけ理解し、説明できるか。 そのために、まずは自然の現象に感動し、それを理解するための力が必要。結局、文章を読んでも、異なる文章だとわからなくなる生徒もいる。教師側がわかりやすく説明し、同じ文章だと声掛けをするなど、どうかみ砕いてわかりやすく教えられるかが大切。勉強のおもしろさを感じてもらったり。現象を素直に楽しい、きれいと思える授業にしたい。
英語	絶対に必要なのは、知識の量と再現速度。まず、一定の知識や理解必要。インプット(帯活動)も必要。英単語や文法をインプットし、それをどうアウトプットするか。使い方がわからない子が多い。そこが課題。
技術・家庭	実技教科においては、学びに向かう力、姿勢が大事。 言語・数量スキルは詰め込みもやむなし。それができないと説明書も読めない。情報スキルは、わからなかったら調べるとか、そういうのを高めたい。
保健体育	学力って????…子どもたちに学ばせるのは、人の話をしっかり聞く、コミュニケーションの力、ふりかえり(一時間の内容をことばで表現させる)などで自身の意見を他者に伝えられる機会を充実させることが大切。それが他教科とのつながりになるのでは…。

○提案授業

本年度の提案授業は下記のスケジュールで実施した。

- 9月16日 提案授業（社会科・保健体育科）
 ※学級閉鎖のため現職教育による指導案検討会に変更
- 11月1日 提案授業（英語科・美術科）
- 1月19日 提案授業（理科）
 ※コロナウイルス感染予防のため、サテライト授業にての参観を実施

〈提案授業の流れ〉

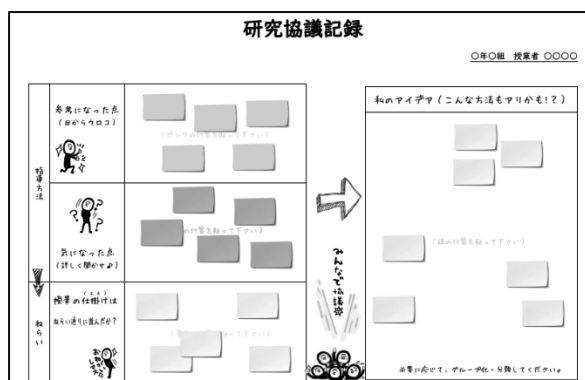
- ①提案授業 ……13:45～14:35
- ②授業別協議（KJ法） ……14:45～15:30
- ③全体会
- ・授業別グループごとの協議内容の発表
 - ・和歌山大学の先生方からの助言
 - ・校長より

提案授業を行うにあたり、事前にグループ内で協議やプレ授業を行った。さらに、授業アイデアの発表という形態を意識するため、協議用紙を一新した。

〈従来の協議用紙〉

項目	基礎学力を定着させるための工夫がされている	生徒が主体的に取り組める工夫がされている	その他
良かった点	赤い付箋	赤い付箋	赤い付箋
課題点	青い付箋	青い付箋	青い付箋
助言・手立て	黄緑の付箋	黄緑の付箋	黄緑の付箋

〈今年度の協議用紙〉



9月の提案授業は直前の学級閉鎖のため、授業進度が追いつかず急遽現職教育における指導案検討会となった。授業者より、授業予定の流れや授業アイデアを発表し、協議を行った。プレ授業が実施できた授業では実際の授業風景も紹介された。新しい協議用紙では、優れているアイデアや気になった点、授業工夫の成果、さらには新しいアイデアを提案し合う4点に的を絞って協議を行った。

11月、1月は計画通りに実施することができた。下の写真は11月の様子である。



授業の様子



協議の様子



全体会の様子



記入された協議用紙

○成果と課題

昨年まで恒常化した研究授業という認識を一新することができた。

6月に行われた現職教育で取り上げた研究主題の「(基礎) 学力」について、教科により「(基礎) 学力」の認識が相違していることが明らかとなった。これを機に、各教科における「基礎学力とは何であるのか」が具体的に全教員に共通認識され、授業者がそのことに重点をおいて授業計画を立てることへの意識づけに成功した。そのため、他教科の教員による提案授業であっても、「(基礎) 学力」が何であるのかを理解した上で、提案授業に参加することができた。

さらに、各個人指導技術に任せた授業研究ではなく、チーム体制で授業を作り上げていくことで、あらゆる視点からの考えが反映された授業となった。また、授業アイデアを紹介する形式の「提案授業」にすることで授業者は自然体で提案授業に取り組むことが可能になったと考えられる。協議においても、内容を限定し授業アイデアに重点を置くことで、普段から各教員が課題としている「タブレットの使用方法」や「グループ活動」、「特定の生徒への対応策」などが話し合われ、教員独自のアイデアや、教科特有アイデア等を知ることができた。これらは、今後の授業改善の足がかりになったのではないかと考える。

課題としては、未だ新しいことを取り入れることに躊躇してしまう教員が多い。若い教員は柔軟な姿勢もある反面、経験の少なさから構成力や対応力に欠ける場合がある。一方、熟練された教員は今まで培われた経験が新しいことを取り入れる妨げとなっている場合がある。今後は、ベテラン層の教員と若手教員が、対話や実践の中で教員間の特性や悩みを共有し、不足している部分を補い合うことで、より質の高い教育を生徒に還元できると考える。まずは、授業研究への参加間口を広げ、交流機会を増やすことが必要である。また、本校の学校教育目標となっている2030年代を生き抜くために必要な力についても引き続き模索し、教員間で共有、理解した上での授業づくりに取り組んでいきたいと考え、そのためにも、和歌山大学との共同研究は必要と考える。